

# 悪党達の世界

—*Oliver Twist* に関する一考察—

早尾葉子

この小説は、1837年～39年（初版38年）に、作者自身の編集する「ベントリーズ・ミセラニー」誌に掲載された。作者25歳の時の作品で、「ピックウィック・ペイパーズ」の後半、「ニコラス・ニッケルビー」の前半と平行して書きすめられた。「ピックウィック」の成功と、私生活では前年に結婚したこともあり、新進作家として希望に満ちていただろうと思われる。それまでも、「ボズのスケッチ集」や「ピックウィック」を發表していたけれども、「オリバー・ツイスト」は作者にとって初めての小説の形をとった作品であった。

十八世紀は戦争のために欧州各国の産業の発達が遅れていたため、イギリスの産業は隆盛であった。特に十八世紀後半の産業革命の与えた効果はめざましいものであった。しかし、平和の回復と共に各国の産業も復興し、イギリスの輸出の流れはとどこおり始めた。それまでは、フランス革命、ナポレオン戦争という三十年近い年月をイギリスだけでヨーロッパ全体の生産を引き受けられるほどであったので、戦後の輸出不振による打撃は非常に大きなものであった。また、穀類の値の暴落は田園の地主・農民に痛手を与えた。田園の貧民達は悲惨のどん底に落ち込み、都会に流入する者が多かった。

この様にこの小説が書かれた時代の庶民達は、田園で農業労働者、都市での商業・工業労働者、双方がひどい状態であった。第8章で、オリバーがロンドンに向う途中の村々に乞食を禁止する看板が立てられていたり、またオリバー自身がまるで乞食のようであっても特に他の人々の同情を引くこともなかった、と書かれているが、その当時の有り様をよ

く伝えている。貧民達にとっては何とも苛酷な現実であり、それはこの小説の中で、田園においては救貧院、都市においてはロンドンのスラム街（フェイギンの住み家とその周囲など）の描写を見れば明らかである。貧者達には救貧院にあってゆっくり死んでいくか、スラム街にあって犯罪者となっていくか、この二つの道しか残されていないかのようにある。力の弱い者達は体制に逆らわずに死に、反抗心のある者達は生きるための闘いを始めなければならなかったのだ。例えその闘いが犯罪として現れても、彼らにはどうすることも出来なかった。

さて、この小説は勸善懲悪の構成をとっている。善の世界と悪の世界はこの対比が非常に明確で、あまりにはっきりと分離しているため、作品が単調であるという印象を受けるが果してそうだろうか。また、善の世界の善、悪の世界の悪とはいかなるものと考えられているのだろうか。まず善の世界を考えてみよう。善の世界の人物達は二つのグループに分けられるように思う。その第一グループに入るのは、ブラウンロー氏、メイリー夫人、ローズである。彼らの役割は、富んだ善人、与える人というものであり、善良で同情心に満ちている。階級としては紳士階級に属しており、貧窮することは全くなく満ち足りた人々である。（彼らは将来の作品では「荒涼館」のジャーンデイスにも、「マーチン・チャズルウィット」のベックスニフにも変化し得るのかもしれない。）彼らの世界は、平和で衣食に足り、暖かい。小説の構成上は、主人公オリバーはこの世界に生まれたにもかかわらず悪の世界にさらわれ、再びこの世界に戻るといふものである。この世界こそオリバーの正統にいるべき場所、ここでこそオリバーは生かされるはずなのだが、小説の中のこの世界は退屈で魅力に乏しい。これは、対称をなす悪の世界の複雑さ、怪奇さ、多様性と比べてしまうからかもしれないが、作者自身の好みの傾向もあるのかもしれない。作者がいかに善の世界を美化しても、そこに魅力を感じているようには思われない。あまねく照らされているために

深みが欠けるのだ。紳士階級の人々も後の作品になると、ただ幸福な、何不自由ないこの世の楽園に住んでいるだけではなく。例えば、「大いなる遺産」のハヴィッシュ嬢、エステラ、「荒涼館」のジャンディス、「二都物語」のシドニー・カートン等であるが、この小説では、まだ善の世界に陰影のある人物はいない。この与えるだけの善人達（彼らはもちろん与えることによって何の損害もうけず、あり余るものを与えているにすぎないのだが）はディケンズの小説の中にしばしば登場する *deus ex machina* としての役割を果たす。

善の世界の住民達のもう一つのグループに属するのは、主人公オリバー、その初期の友人ディックである。彼らは無力で貧しく、清らかである。お互いに深い同情心を持って他者の精神的な支えになり得るが、他者の生活自体を変える力は持っていない。彼らはいわば被害者なのだ。善良な人々の庇護を必要としていて、それを得られたオリバーは（その生れのためもあるが）幸福になり、得られなかったディックは死んでしまう。富んだ善人と清らかな弱者である善人との間には保護者、被保護者の関係があるといえよう。この二人の少年は物語を積極的に導く性質は持っていない。それだけの強さが無い。オリバーは育った環境は悪いのだが、いつもけがれなく、言葉使いも上品である。作者の意図としては、素姓が良いため、親から受け継いだ透明な輝く個性を持っているということだろう。また、オリバーが主人公であるため、読者の同情を十分に引くように意図されてもいただろう。人間はその環境によって変化していく、という考えを作者が持つようになるのは、もっとずっと後になってからで、それから「大いなる遺産」のピップのような主人公が生れるのである。消極的にはあるが、オリバーはひたすら純粋に生きる。その純粋さ、けがれのなさ、無垢であることは、貴重なものだ。それがかえって彼と対立する現実を如実に示している。

オリバーは母の死と共に生れ、自らもしばしば死に直面する。彼をお

おう死の影は色濃いものだが、ディックほどではない。ディックにとって死は安らぎで、生よりも親しいものとなっている。死ぬために登場している人物なのだ。フリIPP・コリンズはディックについて、死ぬだけがこの小説の中での彼の役割だ、と述べているが(1)、その説は読む者を納得させる。ディッケンズの小説の中には、このように死によって永遠の命をもらう子供達がしばしば登場する。「クリスマス・キャロル」のティム、少女ネル、「荒涼館」のジョーなどである。この子供達はみな、現実の苛酷さに押しつぶされていく被害者なのだ。

さて、次の悪の世界に目を転じてみよう。悪の世界の住民達は善の世界の人々に比べて多種多様である。彼らのうちには人間の弱さ、醜さが集約されているようだ。ある者の悪は道徳的なものにその源を発して権力をふりまわし、ある者の悪は犯罪となって現れている。彼ら悪人達は、しかし、善人達よりもはるかに生き生きとし、現実には生きている人間のような。我々読者に訴える力は、ブラウンローやメイリーなどと比べものにならないぐらい強い。

この小説における悪人達を考えてみると大きく二つに分けられる。一つは物語前半のバンブル氏が代表する権力者達。もう一つはフェイギン、サイクスが代表する犯罪者達である。まず、権力者達について考えてみよう。権力者達とは、オリバーがロンドンに出るまでいた教区の委員、教会委員、治安判事、陪審員などであり、その下で働く小役人バンブル氏である。作者は彼らのある政治勢力の代表としてではなく、個人として愚かで狡猾な人物として描いている。真にオリバーのおかれた悲惨な状況に抗議するつもりなら、社会機構の改革を考えないわけにはいかないのだが、作者はそれを個々の人間性に求めている。体制を代表する紳士達の取り澄ました様子を揶揄し、いささか滑稽に描くばかりだ。彼らはもちろん悪事を働いている気など毛頭なく、自らに課せられた仕事をしているだけだから厳密な意味で悪人とはいえないかもしれない。社会

のある部分を悪であると認めても、その責任を彼らだけに求めるのは酷であろう。彼らはほんの下っ端にすぎないのだから。

教区の役人バンプル氏は、上にへつらい下に威張りちらす小役人根性を効果的にあらわしている。いささか誇張されているが、彼の姿は現実存在する可能性を持っている。(因みに彼は普通名詞になる榮譽を授けられている。)詳細に見ると、このバンプル氏にも、オリバーをあわれに思う人間らしさがあるようだ。オリバーがバンプル氏の上着のはじにつかまって、救貧院からサウアベリー氏の葬儀屋へと小走りに向かっていた時のことである。彼はバンプル氏に自らの孤独を訴え、自分に好意を持つ者は誰もいない、先生は僕のことを怒らないで下さい、と言うが、バンプル氏はその時、いつものように権力を振りかざすことなく、咳払いをして何事かつぶやくと、オリバーの手を取り黙って歩き始めたのだった。(第4章)ここに職を離れたバンプル氏の姿がかいま見られる。結局、この種の悪はバンプル氏達に弱い者への同情心があれば、なくなるものだとは作者は考えているのかもしれない。作者は世の中の機構をこわすつもりではなく、そこに生きる人の倫理感によってその機構が少し改善されることを望んでいるのだ。

このバンプル氏の描かれ方は読者の恐怖心を引き出すものではなく、笑いを誘うものであるのに注目したい。バンプル氏がコーニー夫人に言い寄る場面はどうだろう。(第23章)また、その後の尻に敷かれた生活はどうだろう。彼は小さな権力を与えられた小心者として、私達にあざけりではなく、むしろあわれみの気持を引きおこさせる。

次にこの小説で最も重要でまた、読者に訴える力の強い犯罪者達の世界について考えてみよう。この世界の住民達は種々雑多で、活気に満ち、笑いの面、恐怖の面を含めて作者が本領を発揮できる世界である。また、この世界を最も重要だと考えるのは、これがオリバーを救貧院から紳士の世界に引き渡す役目をしているからだ。構成上、オリバーは救貧院か

ら直接、紳士達に迎え入れられることはできない。この世界はオリバーの生きる世界を変える働きをしているのだ。犯罪者達はロンドンのスラム街に巣くっている。フィリップ・コリンズも述べているように(2)、近代都市としてのロンドンが、この犯罪と暴力の世界に深くかかわっており、都市ロンドン自体が凶悪な生物のように感じられる。例えば、後に述べるサイクスが逃亡のはてに自分にとって最も危険なロンドンに戻ってしまったこと、そして、そこで死ぬことは、ロンドンがサイクスの一部となって切り離せぬ関係にあることを示しているようだ。ロンドンは、結果としてオリバーがたどり着く平和な田園にある紳士の世界と対比させて、犯罪、暴力、恐怖のシンボルとして用いられている。また作者がいかにも田園のメイリー邸を美しく描こうと、作者自身がこのゴミゴミとした都会に愛着を感じていたからこそ、ロンドンの描写は現実感、臨場感をもって我々に迫ってくるのではないだろうか。

まず、オリバーがロンドンに出て属することになる窃盗団の首領、フェイギンについて述べてみたい。ペンギン版の注は、フェイギンについて次のように述べている。

Fagin was modelled on a well-known Jewish fence called Ikey Solomon. The Jew-fence was not merely a London character but was known all over the country, according to a contemporary report.

'A Jew seldom thieves, but it worth than a thief; he encourages other to thieve. In every town there is a Jew, resident or tramping . . . if a robbery is effected, the property is hid till a Jew is found, and a bargain is then made.

現在の読者である私達にはすぐに理解できなくとも、当時の読者にはこのユダヤ人がどういう仕事をしていたのかわかっただろうし、この世界の持つ雰囲気も感じる事ができたであろう。しかし、この名前、ポブ・フェイギンにはもっと深いいわれがある。ディケンズが12歳の頃、

父ジョンが借金返済不能のため、一家はマーシャルシー監獄に入れられた。幼いディッケンズは靴墨工場に週6シリングか7シリングで働きに出されていたが、下層の子供達と共に働き、帰る家庭もない状態で、誇りを失わずに暮すことは感受性の鋭い少年にとって、大変な重荷であった。この仕事が遠縁のジェイムズ・ラマートによって紹介された時、彼の両親は大喜びでこれを受けた、とジョン・フォースターの「チャールズ・ディッケンズ伝」巻1に、ディッケンズの回想として載っているが、この the offer was accepted very willingly by my father and mother という言葉には、ディッケンズの苦々しげな気持ちが現われている。おそらく少年ディッケンズは両親がこう易々とこの不名誉な仕事を受け入れるとは思わなかったのだろう。この時、両親には息子の心の中の苦しみを推察する余裕はなかった。

こうして働くことになった靴墨工場に、ボブ・フェイギンがいたのだ。同じ本に、次のように書かれている。

Two or three boys were kept at similar duty downstairs on a similar wages. One of them came up, in a ragged apron and a paper cap, on the first Monday morning, to show me the trick of using the string and tying the knot. His name was Bob Fagin; and I took the liberty of using his name, long afterwards, in *Oliver Twist* (3)

この少年は慣れぬディッケンズはよく仕事を教えてくれたし、仲間になじめない彼に親切だった。そんなボブ少年をディッケンズは有り難く思う反面、自分と彼とは違うという誇りを捨てることは出来なかったし、彼と心から打ちとけることもなかった。この様に少年ディッケンズに初めて仕事を教えてくれた親切なボブ・フェイギンの名前を、オリバーに仕事を教える者の名として借りている。しかし、この小説のフェイギンは犯罪者で、最後には処刑される人物である。現実のボブ少年とはあまりにもかけ離れた人物だ。ここに作者の屈折した思いを感じるの考えすぎ

だろうか。この靴墨工場時代はディケンズが決して戻りたくない、思い出したくもない時代であり、そこで親切にしてくれた少年の名でさえも小説の中で悪人の名に借りたくなるほどのものだったのであろう。ただし、ここで靴墨工場時代のディケンズの精神的痛手を詳しく述べるつもりはない。ここではその時代の知人の名を作中の悪人の名として残した作者の気持だけを見ておこう。ともかく、実生活の上でディケンズがそうであったように、オリバーもフェイギンと同化することは拒みながらも、頼らざるを得なかったのだ。

サウアベリー氏の葬儀屋を飛び出してロンドンに向かったオリバーは道中で知り合ったアートフル・ドジャーに導かれてフェイギンの世界に入る。フェイギンはドジャーの親方で、窃盗一味の主領であるが、ドジャーの言う a spectacle old gentleman とか a merry old gentleman という表現でこの作品に登場する。無垢なオリバーの目に写ったフェイギンは沢山の孤児達を養う親切で陽気な老人であった。いわば善の世界の富んだ善人、与える人のイメージである。フェイギン一味の陰れ家でのすりの練習風景（第9章）は活気と笑いに満ちていて、オリバーが彼の人生でそれまで一度も味わったことがないくらい楽しいものだった。何も知らぬオリバーは涙が出るほど笑い転げるが、先に述べた、バンブル氏と共に葬儀店に向かった時の孤独感などどこかにけし飛んでしまっている。この隠れ家は陽気で暖かく、食べ物もあり、仲間達までもいるのだ。

しかし、浅い眠りから半分さめて見たフェイギンは、仲間が自分を裏切らなかつたことを喜び、死刑となった彼らにほんの少しの同情も見せない、卑しい、自分本位の人間だった。（第8章）オリバーは自分が見たものが何だったのか判断がつかぬまま、フェイギンにうまくごまかされてしまう。彼を尊敬のまなざしで見さえするのだ。一方、フェイギンは父親のようにオリバーに仕事を教えるし、お前は偉くなるだろう、というような話をしたりする。悪人達と暮らしていてもオリバーの心は平和



であった。

この浅い眠りまでのオリバーはフェイギン一味を信じ切っている。その後は多少の疑問を抱くが無知のために彼らの真の姿を見抜くことはできない。けれども、この小説の中ではこの眠り以降、彼らの姿はより明確なものになってゆく。そして、オリバーを失ってから、その滑稽な仮面をかなぐり捨てて、暴力と恐怖と不信の様相を深めていく。

ブラウンロー氏のもとから再びフェイギン一味のもとに連れ戻されたオリバーにとって、フェイギンはかつての姿を全く失っていた。彼は自分（と自分の仲間）を守るためには、多くを知りすぎた人間や、おしゃべりすぎる人間を綿密な計画を立てて消してしまうような人間だった。

(第18章) フェイギンはオリバーの義兄モンクスの頼みによりオリバーを悪人達の仲間に入れる必要があり、オリバーをサイクスと共に強盗に出すことにする。この二人の密会の様子(第19章)は二人の関係を見る上で興味深い。サイクスは常にフェイギンの上手に出ている。フェイギンがそれを許しているのは、彼がサイクスの中に自分よりもはるかに凶悪な犯罪者を見ているからだろう。オリバーをサイクスに引き渡すことに決めたフェイギンが、帰宅後オリバーに話をしようとして、その悲しみに満ちた寝顔を見て起こすのをやめる場面は何を物語るのだろうか。この躊躇の中に、フェイギンもオリバーに対して憐れみの感情を持ったと考えるのは考えすぎだろうか。先のバンブル氏の例のように、オリバーの純潔さは他者の善なる心を引き出す可能性があるように描かれている。

強盗に失敗したオリバーがメイリー家で安らかな生活を送っている時、オリバーは再び夢(第一回目は浅い眠りと表現したが)を見る。夢の中で見たのは、フェイギンとモンクスが家の中のをぞき込んでいるところだった。これはオリバーの平和な生活を脅かす影として効果があり、またそれ以後の小説の流れの上でも重要である。この二つの夢は浅い眠

りには共にフェイギンが登場しているが、彼がオリバーの上に無意識に大きな力を及ぼしているのだろうか。ともかく、この二つの夢の後、話は他の局面に向って動き出すのだ。

フェイギンは窃盗団の首領としてついに捕えられ、裁判にかけられる。この時になって自分の利害にばかり向けられていたフェイギンの目が初めて他に向う。彼の信念はナンバー・ワンの思想、自分を大切にすることが一番であるというものだ。それが最期となって自分から目が離れる。救われたいという気持はあるのだが、妙に客観的になってしまっている。そこで彼の見たものは、目、目、目である。自分に注がれる人々の目。それは彼が今日まで意識したことのないものだった。

判決の後、フェイギンは死の恐怖に錯乱してしまう。その牢獄にオリバーが訪ねるのは物語の構成上フェイギンの役割はすでに終わってしまっているのだから、いささか不必要な気がする。死に怯えるフェイギンの姿を明確にして読者を納得させる必要があったのだろうか。

さて、犯罪者達の一味の構成員の大部分は幼い子供達である。次にこの子供達について述べてみたい。

前述のようにオリバーがサウアベリー氏の葬儀屋からロンドンのフェイギンの世界に入ることを導いたのはアートフル・ドジャー（ジャック・ドウキンズ）というフェイギンの手下のスリである。ドジャーはオリバーが乞食同然の暮らしをしながらロンドンに向かった時、彼に親切な声をかけてくれた初めての人物でオリバーと同じ年位の少年だった。オリバーはディック以外に友人らしい友人を持っていなかったし、バンプルに訴えたように孤独感にさいなまれていた。そこで同じ年ぐらいの陽気で親切な少年の助けを受け入れ易かったのだろう。これが大人であつたら、こう易々と相手の話にのっていったかどうか疑問である。というのは、相手が信頼に足る（と思った）ドジャーでも、第8章に見られるように、自分が連れて行かれた場所があまりにも汚なく恐ろしかったので、オリ

バーは逃げようかと迷っているからである。

ドジャーに導かれて行ったフェイギンの家にいたのは、オリバーと同じ年頃の子供達だった。そこには火もあり、食べ物もあり、陽気な活気に満ちていた。子供達はみな孤児で誰一人頼る者もなく、自分で自分の道を切り開かなければ生きてゆけない。こういう子供達のたどる運命としては、何もせずに餓死するか、反抗するか、犯罪に走るかである。オリバーにもその可能性はもちろんある。先に述べたように餓死するオリバーにはディックがその代理を果たした。反抗者としてのオリバーにはドジャーが、犯罪者としての彼には、ノア・クイポールがその代理を果たしているように思う。オリバー自身はこれらの可能性のいずれの道をたどることもなく、この子供達には決して到達することの出来ない世界に救われていく。

ノア・クイポールはサウアベリー氏の葬儀店でのオリバーの先輩である孤児で、彼とのけんかが原因となってオリバーはロンドンに向かう。後に再登場して、ナンシーとローズの密会を立ち聞きするが、この役目は特にノアである必要もなく、子供達の中で主だったドジャーあたりにさせても良かったかと思うが、ドジャーやベイツでは立ち聞きという陰湿な役割をつとめるには少々陽気すぎるため、狡猾なノアが適任なのかもしれない。フェイギン一味に関わりながらも、その陽気で活気に満ちていた時にはなく、暴力的で陰惨な気配を漂わせた頃にノアが再登場するのは、彼の性格にふさわしい。ドジャーの逮捕のきっかけを作り、フェイギンを有罪とする検察側の証人となったノアは、そのために自分は無罪となった。こう考えてくると物語の構成上ノアの果たした役目は大きい。彼は葬儀店でオリバーとけんかをしてオリバーをロンドンに向かわせるきっかけを作り、再登場してから、フェイギン一味の崩壊のきっかけを作っている。その後、彼は密告屋という、いかにも自分に適した仕事を考えつき、それに精を出す。つまり、彼は挫けることなく、抜け

目なく、彼なりに自力で自分本来の性質に適した生活を続ける。他者に頼っているのではなく、自分で自分の生きる道を切り開いているのだ。それを作者も、共感の気持を持っているわけではないが、弾劾することもなく、そのままに受け入れているようだ。

反抗する者としてのオリバーの身がわりと考えられるアートフル・ドジャーの場合はどうであろうか。ドジャーは居所のないオリバーをフェイギン一味の世界に導く役割を果たした。彼がつかまってから、その穴を埋めるかのようにノアが再登場するわけだが、このドジャーの逮捕がフェイギン世界の崩壊の兆しとなる。彼はわずか2ペンス半の煙火入れを盗んだためにつかまるのだが、法廷に引き出されたドジャーには、反抗者の面目躍如たるものがある。オリバーが委員会の前に連れて行かれた時とは正反対に、怯えるどころか言いたい放題。看守に悪態をつき、傍聴人達を大喜びさせ、大笑いさせる。オリバーは世間に対して萎縮しているが、ドジャーは挑戦し続けるのだ。それは、あの有名なオリバーの“Please sir, I want some more.”のシーンでオリバーが挑んだ闘いの発展したものといえる。ただし、オリバーはくじに負けてそれを言う役目を押しつけられたのに対し、ドジャーは自らの意志で挑戦している。ドジャーの挑戦は弱者全体の立場を代弁しているものといって良い。だからこそ観衆を喜ばせるのだ。彼はスリではあるが、一般社会の構成員の一人だと認められていると考えてよいだろう。判決が下ると彼は感勢の良い啖呵を切り、看守に衿首をつかまれて退場するが、その退場は華々しい。彼の最期は仲間達やフェイギンにさえも惜しまれているという点で、また、ドジャー自身恐れてもいない点で、フェイギンの最期とは異なり、痛快でさえある。

子供達の中で最も快適な未来を与えられたのは、チャーリー・ベイツである。彼は改心してロンドンを去る。ロンドンを去ることによって、彼は自らの過去ときっぱり手を切り新しい生活を始めることができたの

かもしれない。その後、ノーザンプトン州一の陽気な牧畜業者になった、とあるが、彼はフェイギン流のナンバー・ワンの思想を捨て、平凡な、しかし、安楽な生活に入ったのだ。子供達のうちで、こうして常識的に世間に受け容れられる者があったことは興味深い。それは、ある意味で、彼らは大人の犯罪者達とは違って、全くの社会の異分子ではなかったという証明であるのかもしれない。

子供達の姉のような存在の売春婦ナンシーの、この小説での役割は大きい。彼女はディケンズの作品中の女性の中でも、深い内面を持っている点で、他の女性達と区別できよう。この小説に初めて登場するナンシーは陽気で元気一杯な、しかし、だらしのない娘である。ちょうど、あの楽しいゲーム（実はスリの練習）の後に登場するのにふさわしい雰囲気を持っている。彼女は最近、ラトクリフの郊外からフィールド・レインの近くに流れてきたばかりなのだ。

彼女は、ブラウンロー氏のハンカチを盗んだ疑いでオリバーがつかまったのを確かめに行く時、初めは行くのを嫌がっていたのだが、茶目っ氣たっぷりの演技をして仲間を笑わせたりする。自分の生活に何の疑問も持たず、その時々を楽しんでいるのだ。

オリバーを連れ戻す役割を果たした頃からナンシーは少しずつ変化を見せ始める。オリバーの清純さに接して自らを憐れに思ったのかもしれない。バンプル氏もフェイギンもオリバーの無垢な心に打たれたかのように見えたことがあったが、それは一瞬で、後の彼らの行動には何の変化もない。しかし、ナンシーは違った。ナンシーが自分の生活を見る目はドジャーやベイツ達との目とは異なり、その悲惨さをはっきり認識しはじめている。自分のおかれた現状を正確に理解し、また、そこから自力では決して抜け出せないことを理解して、彼女は深い絶望に沈み込んでいく。その絶望の中での拠所としてサイクスが必要だったのかもしれない。ローズのフェイギン一味から足を洗い、自分達の世界に入るよう

にとの申し出も、ナンシーは断わる。もう一度やり直すには遅すぎると思っていたし、サイクスへの思いも断てなかったのであろう。自分の未来に希望を持てるほどの楽観性はもうナンシーの中に残っていなかった。

サイクスと共に暮すナンシーは、かつての快活な娘ではなく、疲れ切ったポロのように炉端に座りこむ女になっていた。その目はすでに外側を見ずに、自らの内面に向かっていった。オリバーを本来あるべき場所に戻したことでナンシーの役目は終わり、その裏切り行為の代償として、彼女はサイクスに殺される。彼女は、初めはフェイギン達の住む悪の世界の住民であったが、次第に精神的にそこから抜け出し、善の世界へと移行している。この小説では、それぞれの世界に自由に入出りできるのは主人公のオリバーだけなのだが、ナンシーは例外となっている。彼女は、どちらの世界にも安住の地を見つけ出すことはできなかった。そして、そのまま殺されてしまう。彼女はこの小説の中で唯一の成長し、変化した人物である。

フェイギン一味はこの小説の中で他を圧倒する重さを持っている。この世界と対立する善の世界は、あまりにも弱小である。ナンシーをそこに投入したのは、善の世界を補強する働きもあるように思う。

サイクスはフェイギンと対称をなす悪党で、野蛮と狡知、動と静の好一対である。彼は粗野で残酷、足かせをはめているのが似合うような男として登場する。その暴力においてフェイギンに勝っており、また、フェイギンの弱味を握っているため、彼に対して力を持つ。フェイギンとは仲間であるが、心を許し合っているわけではない。相手が自分を倒すチャンスをおねらっている事を互いに知っているのだ。サイクスの犯す犯罪は自分の体を使ってのものであるのは、自分以外の誰も信じない彼らしい。そんな彼もナンシーを頼母しい仲間だと思っているし、女としても彼女に彼なりの愛情を寄せていた（第16章）。ナンシーも同じだったが、彼

は彼女に安らぎを与えるような愛し方は出来なかった。彼が病気になった時、ナンシーが献身的に看病したことを彼なりに感謝していたし、彼女にもそれはわかっていた。彼女にはそれだけで充分だったのだろう。ここにローズからいくら勧められてもサイクスを見捨てることが出来ずに、彼のもとに戻るナンシーの必然性があるのだし、ナンシーの裏切りを知ったサイクスの怒りの源がある。彼はナンシーが自分の理解できないものに目を向け始めたことに戸惑い、不安を感じたのかもしれない。彼は彼なりの愛情と信頼を裏切られたことに怒り、自己保身のための恐怖を感じていたのだろう。ナンシー殺害の場面の恐しさは、単に殺人という犯罪のために生じているだけではない。ディケンズは公開朗読会でこの場面を好んで読んだと言われているが、この場面には、暴力と、その暴力を行使した者に生じた恐怖心の増大という複雑な要素がある。殺人者サイクスは殺した瞬間から、殺された側のナンシーの恐怖心にとりつかれてしまった。いや、ナンシーの恐怖ばかりではない。これまで彼に感じていた人々の恐怖が自分にはね返ってきたようだ。これまでにもサイクスは、多かれ少なかれ、この様な事をしてきただろうに、この怯えは一体何なのか。ナンシー殺害後のサイクスは、それ以前の粗野で残虐なサイクスとは違い、追われて怯えている、追いつめられた獣である。その追われる姿は鬼気迫り、見る者を不安にさせる。スラムに巣くっていた悪党どもは、群集達にとって異物ではなかったが、サイクスはその枠を破り、さらに巨大な怪物になったため、人々から切り離され、捨てられ、彼らの敵になってしまった。いや、ここの描写では、群集は善良な市民ではなくなり、追跡に興奮する獵犬になっている。自分は傷つかず、他の血が流されることに期待し、胸を躍らせている。悪は伝染するものなのだろうか。人々はすでに攻撃する者になっており、害を与える者にもなっている。ちょうど「二都物語」のパリ市民のように。

サイクスはその後、心理的にはナンシーの目に追いつめられ、現実的

には怒り狂った群集に追いつめられて、隠れ家の欄干からころがり落ちて死ぬ。彼はナンシーを殺したことにより初めて恐怖心を持ち、ナンシーの目につきまどわれるが、これは良心の苛責ではない。これは、ナンシーの目でもあり、自分の目でもあり、群集の目でもある。ちょうどフェイギンが裁判で多くの目に取り囲まれるのと同じであろう。

この様にこの小説の中の悪の世界は、主要な四人の人物（ドジャー、フェイギン、ナンシー、サイクス）の死によって崩壊する。この世界は単に善の世界の対称をなすものとして存在しているのではない。善の世界は、人物達についても深みに欠け、多様性に乏しい。そこの住民達は、ただオリバーに助けを与えるだけで、自らの人生において何も主張していないように見える。いわば、現実味のない繰り人形のような人物ばかりだ。彼らは読者に何の明確な印象を与えることもない。それに反して、悪人達の世界はどうだろう。子供の頃にこの小説を読んだことのある人は、十年後、二十年後に、メイリー夫人やブラウンロー氏を思い出すことは稀だろう。しかし、彼らの大部分はフェイギンやサイクスを、その情景と共に思い出すのではないだろうか。悪人達の多様性、内面の複雑さ、怪奇さは、読者を魅了せずにはいられない。彼らの世界こそがこの小説を導いているのだ。故に、構成上は、この四人の悪人達の死をもって、この小説は終わっていると行って良いだろう。

## Notes

- ① *Dickens and Education* ; Philip Collins, Macmillan & Co. Ltd. 1965. p. 174.
- ② *Dickens and Crime* ; Philip Collins, Macmillan Co. Ltd. 1964. p. 262.
- ③ *The Life of Charles Dickens Vol. 1* ; Jahn Forster, Everyman's Library No. 781, p. 22.